クリスマスの喜び　　ルカ 2:15-20

1.アドベントの喜び

アドベントキャンドルは、基本的には「紫」です。紫は「悔い改め」を意味しています。ですからアドベントの「紫」は、救い主の降誕を、悔い改めをもって迎えることを教えています。しかし、今日では、心静かに自分を省みながら救い主を待つアドベントの期間が忘れられてしまっています。ところが、アドベント第三週の「羊飼いのキャンドル」だけは色が違います。これは、「ばら色」で、紫を薄めた色になっています。というのは、「羊飼いのキャンドル」が「喜び」を表すからです。救い主を待ち望むこと、静まって神の前に出ることが、じっと心を押さえて真剣にまた深刻にというよりも、私たちの心を満たす喜びだからです。

「クリスマス」は “Christ” と “Mass” が繋がってできた言葉です。Mass とはカトリックのミサ Missa と同じ言葉です。ラテン語でミサ、英語ではマスと言います。直接的には聖餐式のことを言うのですが基本的には礼拝ということです。ですから「クリスマス」とは「キリストへの礼拝」ということです。そうするとクリスマス礼拝ということばはキリストへの礼拝の礼拝？となってしまいますね。(笑) 今日の説教題の「クリスマスの喜び」とは「キリストを礼拝する喜び」ということになります。クリスマスはキリストへの礼拝ですからクリスマスの喜びは、パーティやプレゼント、コンサートやイベントから来るものではなく、キリストから来るものであり、キリストを礼拝することの中にあるということになります。クリスチャンなら、この喜びを知っているはずです。「聖しこの夜」などなじみの讃美歌もクリスチャンは救い主キリストを知っているので賛美する時に喜びが沸き起こります。ほんとうの喜びを知らない人は、「笑い」や「楽しみ」が「喜び」であると思い込んでいます。しかし、「笑い」も「楽しみ」も否定的なことよりは良いものでしょうが一時的なものにすぎません。しかも大笑いした後、あるいはとても楽しい時を過ごした後は逆に寂しさや虚しさが残ってしまうこともあります。ヘンリ・ナウエンは「私たちは、多くのことに忙しくし、感覚に人工的な刺激を与え、一時的に興奮するという、ちっぽけなことを追い求めているのです」と言っていますが、その通りだと思います。このアドベントの時期、自らがキリストから来る喜びを味わい、キリストを礼拝する喜びを人々と分かち合いたいとそのように願っています。

2.聞く喜び

では、どうしたら、この喜びを自分のものにし、それを人々と分かち合うことができるのでしょうか。そのことを、きょうの箇所の「羊飼い」から学びたいと思います。

第一に学びたいことは、この喜びは御使いによって告げられたものだということです。ルカ 2:10-11 にこうあります。「御使いは彼らに言った。『恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。』」古代では、王子誕生の知らせは「良い知らせ」また「福音」と呼ばれ、それと同時に恩赦や税の免除が行われたり、金品が配られたりしました。神は御使いによって良い知らせ、すばらしい喜びを伝えられました。ですからもちろん羊飼いの「喜び」は彼ら自身から出たものではありません。外から来たものです。いや、上から来たものと言えます。普通、多くの人は、天からのもの、神から来るもので心が満たされるということを知りません。幸福は、自分たちの回りから来ると信じています。何を持っているのか？人よりも良い思いをしているのか？そういったことに敏感です。ですから、この世で成功して地位を築き、財産を蓄え、多くの人との人間関係を保つことがすべてであり、そのために、あらゆる努力をし、惜しみなく時間を費やしています。

確かにわたしたちはこの世に生きています。他の人との関わりの中で生活しています。食べもの、着る

もの、住まうところ、教育や健康、人間関係がどうでも良いわけではありません。しかし、それらもまたもとを辿れば神から、上から来ていることを忘れてはならないと思います。イエス様はこう言われました。「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ 6:31-33）また、ヤコブ 1:17 には「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。」と書かれています。

多くの人々は、「『信仰』と言っても、それは結局のところ、自分で自分を励ますことであり、自分の力で自分を救うことなのだ」と考えています。「希望」や「平安」、また「喜び」も自分の気持の持ち方を変えて、自分で作り出すものだと主張します。もし、そうであるなら、何も、イエス・キリストを信じる必要はありません。自分の信念を強めてくれるものであれば、どの宗教でも、どの教えでも、また、「いわしの頭」でもいいということになります。また自分の力を信じて歩めばよいと思います。しかし、わたしたちは「人には自分を救う力がない」ということを知り、そのことを痛感しています。自分の力で人を赦すこともできなければ、強制的に人に自分を赦してもらうこともできません。自分で自分を救おうとするのは、自分で靴の紐をつかんで空中に浮き上がろうとするようなものです。救いは神から来ます。信仰は、自分にではなく、神に信頼することです。救いを告げる「喜びの知らせ」は天からやってきます。信仰とは、自分の悟りや信念にではなく、神の言葉に聞き従うことです。羊飼いたちは、神の御子のお生まれという「喜びの知らせ」を聞き、救い主を見出しました。わたしたちも、同じ「喜びの知らせ」を聞いています。この天からのメッセージに聞き、それを受け入れるとき、わたしたちの人生は天の力で変えられていくのです。

3. 見る喜び

御使いは羊飼いに、救い主の誕生を告げ知らせるだけでなく、「しるし」をも与えました。それは「あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」ルカ 2:12 とある通りです。それは生まれたばかりの赤ん坊でした。御使いのメッセージを聞いた羊飼いは「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」ルカ 2:15 と言って、早速、大急ぎで、ベツレヘムの町に向かっていきました。

人口調査のため、ベツレヘムには大勢の人がいたでしょうが、御使いの言葉通りの赤ちゃんを見つけ出すのは、さして時間のかかることではありませんでした。家畜と共に飼い葉おけに寝かせられている、その日生まれた赤ちゃんが何人もいるはずがないからです。赤ん坊となって生まれた救い主を見出したとき、羊飼いは、御使いが現れたことや、御使いが告げたことが夢や幻ではないことを、はっきりと確信し、喜びに満たされました。ルカ 2:20 に「羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」とある通りです。

「しるし」サインというのは「見る」ものです。羊飼いは御使いの言葉を聞くだけでなく、その言葉を証拠立てる「しるし」を見て、神の言葉を確信しました。信仰は「聞く」ことから始まります。神の言葉に聞くこと、聞き続けることほど、大切なことはありません。しかし、信仰は「見る」ものでもあるのです。聖書で「見る」という言葉は、「理解する」という意味で使われています。神の言葉を耳にするだけで終わらず、その言葉の意味していることを理解し、確信することです。

「飼い葉おけに寝かせられている赤ちゃん」が救い主の「しるし」であるというのは、いかにも、小さくみすぼらしく思われます。御使いは栄光のうちに現れたのに、御使いを従えるべき神の御子が、手の平

に乗るほどの小さな姿で、家畜小屋の飼い葉おけにおられるというのは、なんとも、神の御子にふさわしくない「しるし」です。御子は御使いに勝る栄光に輝いておられても良かったのです。

しかし、羊飼いは、この「しるし」に躓づくことはありませんでした。羊飼いは、この貧しい姿の救い主に、神の大きな救いの御業を見たのです。羊飼いは、このとき、キリストの十字架のことも、復活のことも知りませんでした。しかし、神が、この赤ん坊によって世界を救ってくださることを、見て、信じて、理解したのです。そもそも、「しるし」サインというものは小さいものです。昔、アメリカ留学時代に最初のクリスマスの時期、学生同士 6 人ほどでアリゾナ州にあるグランドキャニオンというところに旅行に行きました。行く道路の横に「グランドキャニオンまで 10 マイル」「・・マイル」と言ったサインが出てくるのですが行けども行けども一向にそんなものは見えて来ません。と言うのも山なら遠くからでも見えて、あの山に登るんだなと実感が湧きますがグランドキャニオンは谷ですので見えて来ないのです。ちらっと「本当にこの道で良いんだろうか」という疑問が頭をかすめたりもしました。しかしそのサインを信じて車を走らせると、突然地球が裂けたのではないかと思うぐらい約 360 キロに渡る赤い岩の巨大な断層が目の前に広がったのです。大阪から静岡あるいは広島ぐらいの距離です。圧倒されてしばし私は言葉を失いました。「しるし」サインが示す内容は、いつでも、「しるし」よりも、はるかに大きなものなのです。信仰とは、小さな「しるし」サインを見て、信じて、理解して、それが示す神の、じつに大きな救いの御業に与ることに他ならないのです。

羊飼いは神からのメッセージを聞きました。聞いただけでなく、聞いたことを実行し、語られたことが確かなことを「見て」、理解し、確信しました。羊飼いは「喜びの知らせ」を無駄にしませんでした。それによって、救い主、キリストを見る喜び、救い主を礼拝する喜びに満たされたのです。わたしたちも、この喜びの知らせに耳を傾けましょう。それを人々に伝えましょう。人は、自分で自分を救うことはできません。外からのもの、上からのもの、神の言葉が必要なのです。そして、聞いた言葉に従って、救い主キリストを探し当てましょう。まだ、キリストを知らない人を、キリストをたずね求める場へ誘いましょう。人々とともに、キリストが力と栄光と愛とに満ちた救い主であることを見出す喜びに満たされたいと思います。

4. 神の喜び

最後にここまでクリスマスの喜びとはキリスト（救い主）を礼拝する喜びであり、神が与えて下さる喜びであることを見てきました。そうしますと神が最も喜んでくださることは何であるのかあるいは何が神を喜ばせることになるのか？ということに思いが至ります。それは救われる魂、イエス・キリストを救い主として信じる人が起こされることが最も神を喜ばせることとなります。ルカ 15 章には迷子になった羊、失った銀貨、そして放蕩息子というたとえ話が出てまいります。その中で 15:7 には「ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人のただしいひとにまさる喜びが天にあるのです」15:10「ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです」15:32 には「いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」とあります。このクリスマスの時、私達は救い主なるイエス・キリストがご降誕されて、最高のクリスマスプレゼントをいただきました。そして救われる魂が起こされるということが神様への最高のクリスマスプレゼントになるのではないでしょうか？